

日本鱗翅学会中国支部会報

第16号



ベニモンカラスシジミ ♀

2015年4月

日本鱗翅学会中国支部

日本鱗翅学会中国支部規約

2001年12月2日制定、2005年11月26日改正

第1章 総則

- (名称) 第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。
- (目的) 第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。
- (事務局) 第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。
- (事業) 第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。
(1)年1回例会(総会を含む)を開催する。
(2)年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
(3)その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

- (組織) 第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。
- (義務) 第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

- (種類) 第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。
(1)支部長 1名
(2)事務局幹事 1名
(3)幹事 4名
(4)会計 1名
- (選出) 第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。
幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出。自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。
選出方法は各県の裁量による。
事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。
会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。
- (職務) 第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。
事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。
幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。
会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。
- (任期) 第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。
事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。
幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。
会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

- (例会の内容) 第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。
- (開催地) 第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。
例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。
- (例会の運営) 第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。
- (総会の運営) 第14条 総会は支部会員をもって構成する。
総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。
総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- (会報) 第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。
会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

- (経費) 第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに當てる。
(1)支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
(2)支部助成金(本部に申請)
(3)寄付金、その他
- (資産の管理) 第17条 本支部の資産は事務局が管理する。
- (決算) 第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。
- (会計年度) 第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。
- 第6章 條則
- (会則の変更) 第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならぬ。
- (委任規定) 第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

- この規約は、平成14年1月1日から実施する。
この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について:第4回支部総会申合せ事項)

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。

参加費を支払って参加した非会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

支部長挨拶

鳥取では昨年の夏は雨が多く、日照時間は前年比の1/3という状況でした。今年の1・2月も雨が多く、1月の降水量は昨年同月を超え、日照時間は昨年の半分以下という状況です。天候不順の年が毎年続いているように感じます。

2015年が始まって既に4ヶ月になろうとしています。皆様におかれましては、それぞれのテーマにそって、調査活動を開始し、あるいは計画を練られているかと思います。支部長として3年目となります、こうして会報を発行できるのも皆さんのおかげです。

さて、今年の日本鱗翅学会62回大会は、10月31日、11月1日の両日にわたり、鳥取市とりぎん文化会館で行います。中国地方では、松江大会（2004年、第51回）以来の開催となり、そして日本海側で行われるのは、新潟大会（2007年第54回）、福岡大会（2008年第55回）以来となります。そこで“環日本海”をキーワードとして、シンポジウムで中国地方と大陸（環日本海諸国）の鱗翅目について考えたいと思います。ウスイロヒヨウモンモドキ（含兵庫県東部）・ヒロオビミドリシジミ・キベリゴマフエダシャクなどの国内で中国地方だけに生息している鱗翅目についても触れられるのではないかでしょうか。

この大会を成功させるためにも、みなさんの協力が必要です。多くの会員が参加し、大会を盛り上げていきましょう。第62回鳥取大会のなかで、中国支部例会も開催します。現在の会員数は50名です。皆さんと力を合わせて、大会を作っていくうと思います。今年も皆さんの活躍・成果を祈念します。

中国支部 田村昭夫

岡山県に於けるベニモンカラスシジミの生息地と 食樹に関する最近の知見

三 宅 誠 治 (岡山県)

Fixenia iyonis ベニモンカラスシジミが愛媛県皿ヶ峰で発見されたのは 1956 年のことである。それ以後新産地が見つからないまま衰亡していったが、岡山県新見市で 1969 年と 1970 年に各 1 尾採集された。それ以後、多くの同好者により生息調査が行われ、岡山県西部から広島県にかけて次々と生息地が見つかっていった。また、中国地方の個体は皿ヶ峰の個体とは形態的に異なっており、中国地方亜種 *kibiensis* として記載された（白水・難波, 1973）。1970 年代から 1980 年代には採集に訪れる人が多く、特に卵の採集時に食樹の枝を切ることによる生息環境へのダメージを危惧されたことがあった。

本種の中国地方亜種は、岡山県の他に広島県と兵庫県で記録されていが、生息地の多さから分布の中心は岡山県と言える。本種については環境省、岡山県、或いは鱗翅学会が、それぞれに幾度かの改訂を行いながらレッドデータブックで希少種、準絶滅危惧種、或いは該当せずと、まちまちの判断が下されてきた。判定がそれぞれ異なったのは、判定に携わる担当者が異なったり、各々の考え方方が違っていたりしたことによると思われる。その最大の原因は、本種の生息状況がつぶさに調べられることなく、また個々の生息地に関する情報さえ総括した資料が無く、判定を下すには不十分な状況だったことである。そこで演者は、本種の生息状況を把握するために主に 2010 年から 2013 年にかけて調査を行い、その結果を纏めるに至った。

調査に先立ち文献に記録された生息地を洗い直したところ、記述から特定できる生息地は 47 カ所あった。これらについてすべて再調査を行ったところ、環境変化により生息地が大きなダメージを受けたことが確認されたのは 1 カ所で、それは 2010 年に生息が再確認されたにもかかわらずその翌年に石灰岩の採掘により発生場所そのものが失われたものである。また、目立った環境変化や、採集のために食樹が切られた跡が無いにもかかわらず生息を確認出来なくなった場所も 1 カ所あった。この 2 カ所を除いて、細かなポイントの相違はあるが、記録と同一の地名の範囲内で生息を再確認することが出来た。また、新たな生息地の探索も並行して行ったが、これまで記録されていなかった場所で生息を確認することが出来た場所が 55 カ所あり、岡山県内の生息地の数としては 102 カ所となったことは、三宅(2014)で報告している。なお、この報告を纏めた後にも 1 カ所の生息地を新たに確認している。これらのことから推計して、本種の岡山県内に於ける生息地の残存率は 98% に達することとなった。また開発等による悪影響として、石灰岩の採掘により本種の生息に影響を及ぼしていると考えられる場所は 5 カ所、道路工事による影響を受けている場所が 1 カ所と、いずれも大きな数字とはなっていない。このことから、今後も本種の生息環境は維持されるであろうと推測される。

岡山県ではこれまで本種の食樹として、キビノクロウメモドキとクロウメモドキ（かつてコバノクロウメモドキと呼ばれていたもの）がよく知られており、一部にはタイシャククロウメモドキを記したものもあった。しかし、分布域とそれぞれの食樹が関連立てて説明されたことが無く、漠然と捉えられている程度であった。そこで今回、食樹の自生状況と、酷似するタイシャククロウメモドキとキビノクロウメモドキの区別点も明らかにしておく。

演者がこれまでの調査を行ってきて感じたことは、本種の生息状況は、殆どの生息地で可成り安定した状況であると言うことである。本種はレッドデータブックに登場することがあったが、現状では衰亡の危機にある種には該当しないと判断する。但し、特殊な環境で稀な植物に依存していることから、今後も注意だけは払っておきたいと考えている。本日の発表の基となる個々のデータ等は、既に三宅(2014)に報告済みなので、ご興味ある方はそちらを参照願いたい。

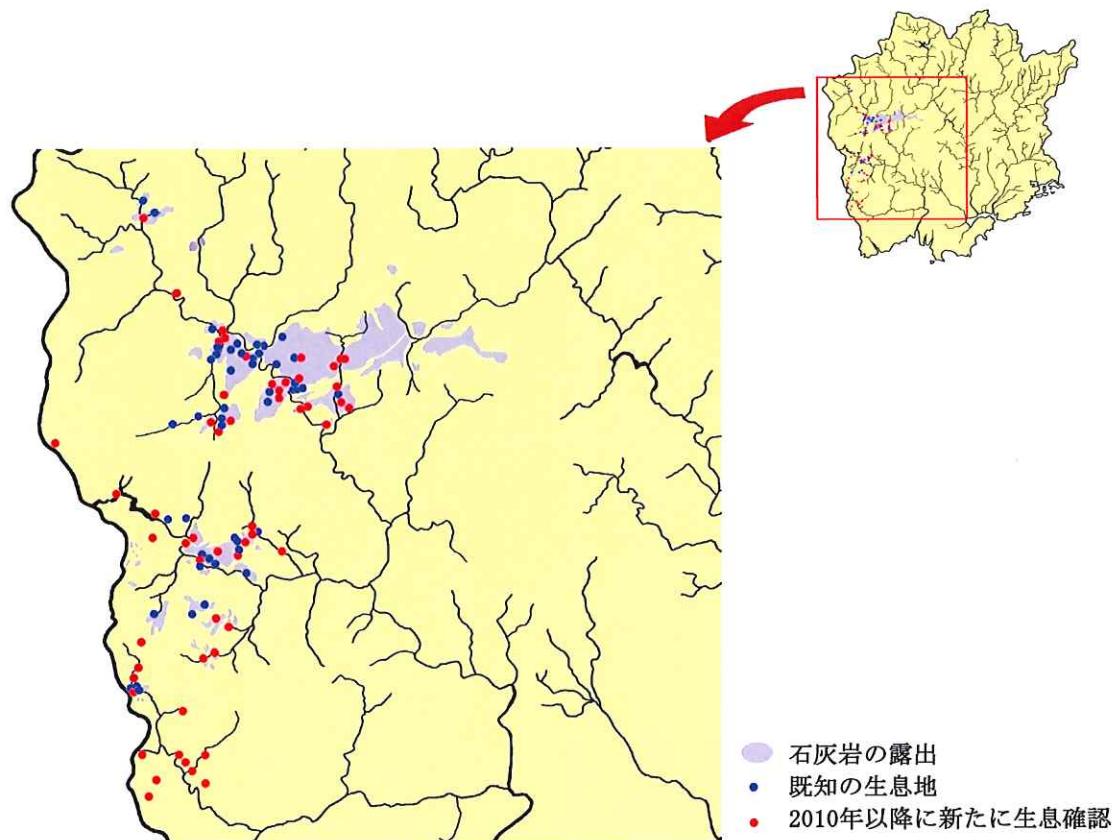


Fig. 1 ベニモンカラスシジミの生息地

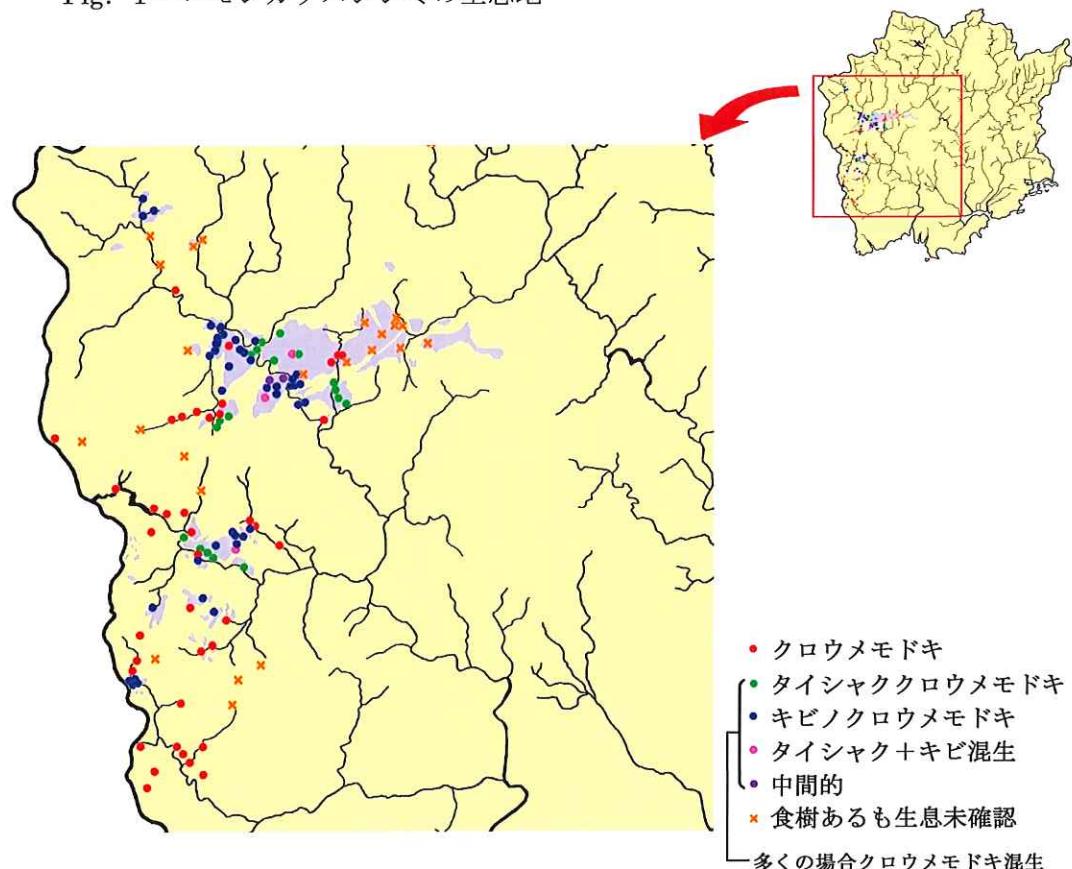


Fig. 2 ベニモンカラスシジミの生息地と食樹



Fig. 3. タイシャククロウメモドキとキビノクロウメモドキ

タイシャククロウメモドキ

葉の先端が突出しない。
葉の表面に微毛が密生し光沢が感じられない。
花弁や花柄が比較的短く、花が小さく見える。

キビノクロウメモドキ

葉の先端が突出する。
葉の表面は無毛か疎らに微毛がある程度で光沢が感じられる。
花弁や花柄が長く、花が大きく見える。

両種が混生する場所もあり、また両種の中間的な特徴を持つ株もあって、交雑が行われていると推測される。樹皮の色を特徴として示した記述も見られるが、個々の変異が大きく識別点としては利用し難い。

引用文献

- 三宅誠治(2014)岡山県に於けるベニモンカラスシジミの生息状況. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (29) 1–23.
白水 隆・難波通孝 (1973) ベニモンカラスシジミの新亜種. 蝶と蛾23 (3,4) 65-67.

ヤクシマルリシジミはいつ岡山県に進入してくるか

岡 野 貴 司（岡山県）

1 はじめに

ヤクシマルリシジミは1990年ごろから少しづつ勢力を拡大し、2014年現在静岡県の西部まで分布を広げている。静岡県以西の太平洋岸（瀬戸内海も含む）の府県で生息が確認できていないのは岡山県だけになってしまった。九州北部の福岡県、佐賀県にも比較的最近進入した。また山口県では、日本海側に進出したグループが山陰の島根県まで迫っている。筆者はいざれ岡山県にも進入してくると確信し、ここ数年来観察を続けていたが、2014年も残念ながら発見することはできなかった。

2 ヤクシマルリシジミとは

*Celastrina*属（ルリシジミ属）から3つの属が独立していたが、日本産に関してはヤクシマルリシジミの*Acytolepis*属とサツマシジミの*Udara*属の2つである。ヤクシマルリシジミ（以降ヤクルリと記す）はインド～東南アジア～中国中南部～台湾などに広く分布し、約20の亜種に分類され、台湾亜種はタイワンルリシジミの名で知られている。日本産は台湾に隣接する八重山諸島産も含めてすべてssp. *ishigakiana* (Matsumura, 1929)とされている。基本的には熱帯・亜熱帯アジアのチョウであり、日本はその北限にあたる。したがって、このチョウの本質を理解するには熱帯アジアにおける生態を基本とし、日本本土産の生態はかなり特化したものととらえるべきであろう。

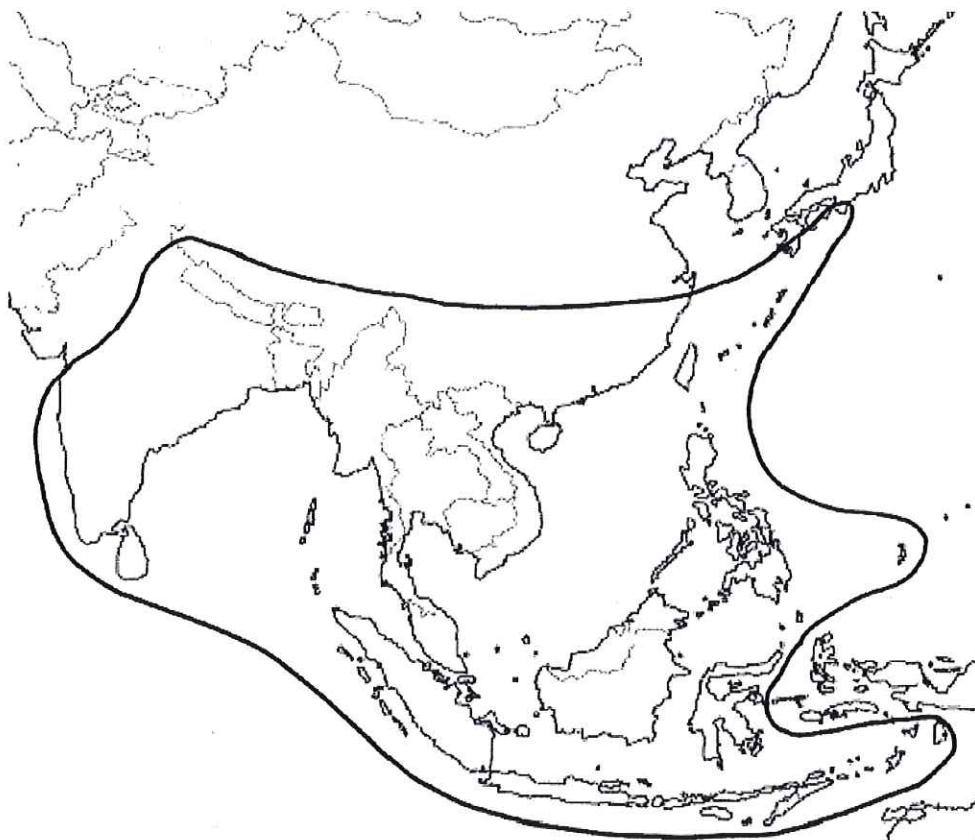


図1 ヤクルリ分布図（“原色台湾蝶類大図鑑：白水隆、1960. 保育社”より作成）

3 日本の分布と生態

1954年発行の“原色日本蝶類図鑑（江崎悌三校閲、横山光男著. 保育社）”には“本種は南部温暖地の特産種で、原産地として知られる屋久島の他には鹿児島県の城山・霧島山・佐多岬・志布志・垂水に見出され、四国では高知に、本州では紀伊半島に発見されている”と記されている。1965年発行の“原色図鑑日本の蝶（白水隆著. 北隆館）”にもほぼ同様の分布域が記されており特に変化はない。これには分布図が掲載されているので次に示しておく。



図2 日本の分布域（原色図鑑日本の蝶：白水隆著. 北隆館より）

1984年発行の“原色日本蝶類生態図鑑III（白水隆監修. 保育社）”をみても、九州南部で少し北上しているものの基本的には大きく変わっていない。分布の拡大は1990年頃から始まっているので、約40年間あまり動かなかったことになる。筆者は、各地の昆虫同好会の会員から得た情報をつなぎ合わせて最新の分布図（次ページ）を作成してみた。ただし、各地域の情報のすべてが2014年に統一されているものではない。また情報が不十分な地域も含まれており、イメージ図として捉えていただきたい。

これから説明の都合上、南九州・四国室戸半島・紀伊半島南部の古い分布地域を“従来の分布域”，その後に拡大した地域を“新しい分布域”とよぶことにする。なお、筆者作成の分布図中の赤色のラインは、“従来の分布域”的境界を示している。

日本における安定した生息地では、年4回程度の発生を繰り返しているようで、九州南部や四国南部では冬季に卵・幼虫・蛹・成虫のすべてのステージが観察できるという。

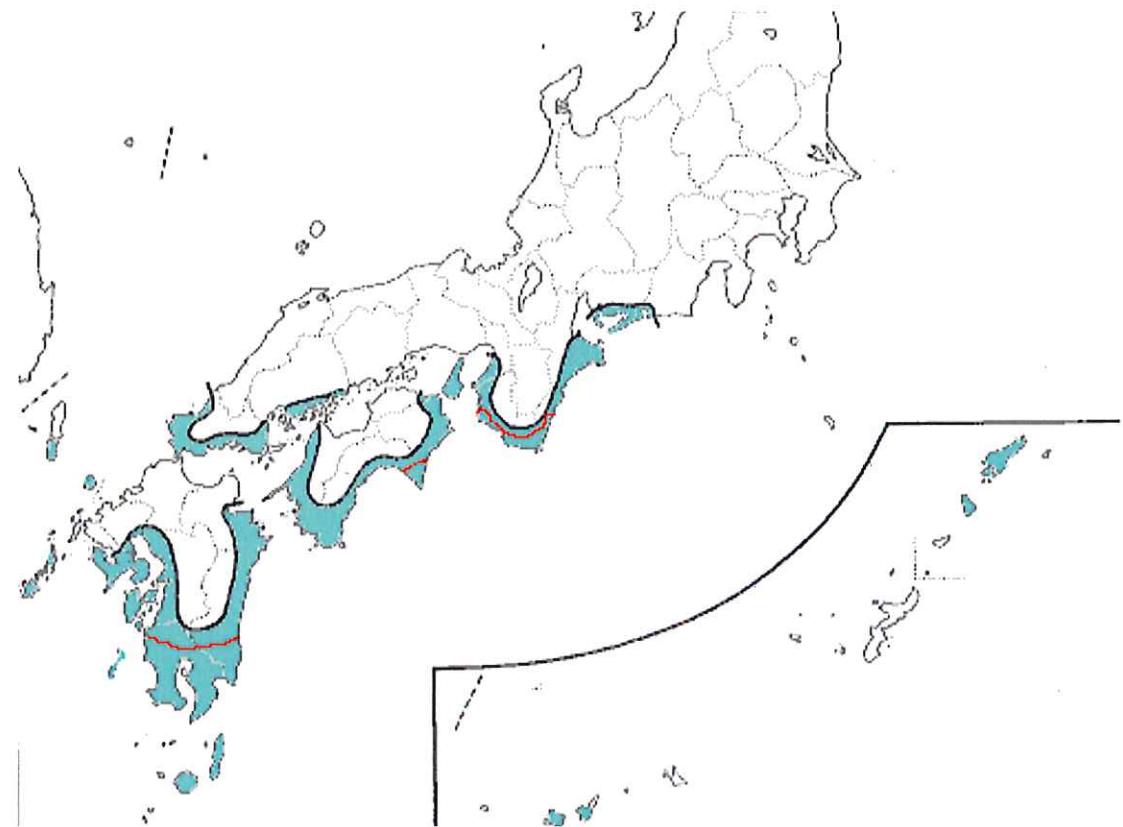


図3 現在の分布域（筆者作成）

しかし、分布の境界付近（中国地方では広島県など）では極めて不安定で、発生回数はよく分かっていない。これらのことから、越冬の休眠性はまだ獲得できていないのではないかと推測している。これらの境界地域では、初冬にバラ類などで卵・幼虫が観察されていることから、越冬可能なもののだけが翌春の発生につながっているものと思われる。休眠性が獲得できていないことが、拡散のスピードを遅らせていることの原因ではないかと推測している。

4 食餌植物

極めて広食性であり、次ページの表（各種資料から著者作成）の食餌植物が記録されている。これらの食餌植物の新芽・若葉・花蕾・花などを幅広く利用しており、サツマシジミのように“花喰い”に特化した種ではない。しかし、よく利用しているものとそうでないものとの差が大きく、また地域による違いも目立つ。宮崎昆虫同好会の岩田靖氏は、宮崎県での食餌植物を詳しく調査し、同好会誌“タテハモドキNo.27”に報告している。これによると、最も利用しているのはイスノキであり、次いでヤマモモが多く、これにバラ類やウバメガシが続くとある。またブナ科に関してはウバメガシの利用度が高いのに対して、クヌギ・アベマキ・コナラなどは低いとしている。鹿児島県でも同様にイスノキをよく食するという観察がある。中国地方の山口県ではイスノキ・ノイバラで、広島県ではアカメガシワ・ノイバラ・園芸種のバラで産卵や幼虫が確認されている。大阪府ではテリハノイバラの利用が多いとの観察があるが、コナラから発見された例もある。また三重県では、バラ類・バクチノキ・リンボク・ウバメガシ・マテバシイ・ヤマ

モモで幼虫が採集されたことが報告されている。

科	属	種
ヤマモモ科	<i>Myrica</i>	ヤマモモ
ブナ科	<i>Quercus</i>	コナラ、カシワ、クヌギ、アベマキ、ウバメガシ、アカガシ、シラカシ ウラジロガシ、アラカシ、イチイガシ
	<i>Lithocarpus</i>	シリブカカシ
ニレ科	<i>Celtis</i>	エノキ(産卵のみ)
ユキノシタ科	<i>Astilbe</i>	テリハアカショウマ
マンサク科	<i>Hamamelis</i>	マンサク
	<i>Corylopsis</i>	トサノミズキ、ヒュウガミズキ
	<i>Distylium</i>	イスノキ
バラ科	<i>Rosa</i>	ノイバラ、ツクシイバラ、ヤブイバラ、テリハノイバラ、ハマナス モッコウイバラ、イザヨイバラ、セイヨウバラ
	<i>Prunus</i>	コヒガンザクラ、シダレザクラ、ヤマザクラ、オオシマザクラ ソメイヨシノ、サトザクラ、カンヒザクラ、ミザクラ、シロハナミザクラ リンボク、バクチノキ、モモ
	<i>Malus</i>	ヒメリンゴ、ハナカイドウ、カイドウ
	<i>Chamaemespilus</i>	カリン、ボケ
	<i>Rhaphiolepis</i>	シャリンバイ
	<i>Pyracantha</i>	トキワサンザシ、ヒマラヤトキワサンザシ、タチバナモドキ
	<i>Fragaria</i>	オランダイチゴ
	<i>Cotoneaster</i>	コトネアスター
	<i>Eriobotrya</i>	ビワ
マメ科	<i>Wisteria</i>	フジ、ヤマフジ
	<i>Millettia</i>	ナツフジ
	<i>Derris</i>	●デリス
	<i>Caesalpinia</i>	●ナンテンカズラ
トウダイグサ科	<i>Glochidion</i>	カンコノキ、●マルヤマカンコノキ
	<i>Mallotus</i>	アカメガシワ
	<i>Sapium</i>	ナンキンハゼ
ミソハギ科	<i>Cuphea</i>	ハナヤナギ
ツツジ科	<i>Rhododendron</i>	キリシマツツジ、サツキ、ヒタツツジ、モチツツジ、ヨドガツツジ セイヨウシャクナゲ
アオイ科	<i>Hibiscus</i>	ブッソウゲ
キントラノオ科	<i>Trilepidatela</i>	●コウシュンカズラ
	<i>Rhytidopteryx</i>	●ササキカズラ
アワブキ科	<i>Melosma</i>	●ヤンバルアワブキ

注:●印は沖縄県での食餌植物

図4 ヤクシマルリシジミの食餌植物

これら各地の昆虫同好者の情報や各種文献から，“従来の分布域”では、イスノキ・ヤマモモ・バラ類・ウバメガシの利用が多く，“新しい分布域”では、バラ類の比重がかなり高いことがうかがえる。熱帯アジアでは野生のバラは分布していない。八重山諸島を除く日本では、熱帯・亜熱帯での本来の食餌植物からイスノキ・ヤマモモ・バラ類への2次的な転換に成功した系統が分布を広げたのではないか。他の植物はさらに3次的に利用されている程度なのである。例えばフジ・ソメイヨシノ・ツツジなどはごくありふれた植物であり、これらを積極的に利用しているのならもっと勢力を拡大しているはずである。山地部にあまり進入していないのも、このことと関連しているのかもしれない。ブナ科のウバメガシが比較的よく利用されているのは沿岸地域に多いことと関係がありそうで、同じく海岸地域中心のテリハノイバラの分布とも重なっている。なお岡山県ではウバメガシ・ヤマモモは海岸線に広く分布しているが，“イスノキは植栽されたもので、自然界では未発見である（倉敷市自然史博物館学芸員：狩山俊悟氏）。”

とのことである。

5 中國地方のヤクルリの現状

現在中國5県でヤクルリの生息が確認されているのは、山口県と広島県である。1996年の秋に山口県周防大島町（屋代島）で発見されたのが最初で、愛媛県から海を越えて進入してきたと推測されている。その後東進を続け、東端の岩国市まで達している。海岸線伝いに日本海方面にも分布を広げ、現在では長門市・萩市から阿武町奈古付近まで進出している。広島県でも山口県とほぼ同時期に下蒲刈町一帯の島嶼部で発見されたが、どこから進入してきたのかはよく分かっていない。呉市では5月、7月、9～10月に記録が集中しているので、年3化が基本だと考えられている。5月には小高い丘や山のピーグで♂がテリトリーを張っているのがよく観察されている。夏はアカメガシワの新芽をよく利用しているともいわれている。発見当時に比べて個体数が増えているということはないので、分布拡大は停滞しているのかもしれない。

6 沖縄県の謎

南西諸島では、屋久島・種子島・奄美大島・徳之島・石垣島・西表島に確実に土着している。しかし、沖縄本島ではしばしば発生しているものの、迷蝶または偶産蝶扱いである。沖縄本島に各種の食餌植物があるのになぜ土着できないのだろうか。土着している八重山諸島での食餌植物（前ページの表参照）は本土と全く異なっている。石垣島や西表島でヤマモモはよく見られるが、これを利用しているという報告はない。ごく普通に分布しているスダジイ（ブナ科*Quercus*属）からも確認されていない。また先島諸島だけに見られるバラ類のカカヤンバラからの報告もないようである。これに対して奄美諸島ではイスノキ・バラ類・サツキ・カンコノキを利用していること“奄美の蝶図鑑（久保邦照：2005年）”に記されており、これは明らかに本土型の食餌植物であって、八重山諸島型ではない。その中間に位置するのが沖縄本島である。熱帯アジアでの食餌植物の資料がないので憶測の域を出ないが、亜熱帯の沖縄本島では熱帯アジアタイプの食餌植物があまり多くはない。しかし本土でマンサク科イスノキ属・ブナ科・バラ科など2次的に食餌植物を広げていった系統も南下していないことが、土着できていない原因ではないかと思っている。八重山諸島のヤクルリは前述の通り本土のヤクルリと同亜種であり、台湾亜種とは異なるとされているが、食餌植物の上では台湾産との共通点が多いのではないか。少なくとも2次的にイスノキ・ウバメガシやバラ類などに広げていった系統とは異なる。沖縄本島で偶発的に発生しているヤクルリが何を食餌植物としているのかは、本土のヤクルリの生態を解明する上でも大変興味深いテーマである。

7 岡山県への予想進入経路

兵庫県の生息域は淡路島だけである。香川県は徳島県と隣接する限られた地域だけに分布している。これらのことから、この2県の方向（つまり東側）から岡山県に進入してくるとは考えにくい。広島県は岡山県と接する福山市まで分布を広げており、岡山県への進入ルートはこの方面からであろう。ただし、福山市も沼隈町～鞆付近で足踏みし、岡山県境に迫っているという状況ではない。進入してくるとすれば福山市と接する岡山県笠岡市の茂平地区、あるいは海からのルートで笠岡諸島～神島を有力な候補地と考えている。海からの進入は各地で観察されており、愛媛県から山口県周防大島町（屋代島）、

三重県志摩半島から愛知県渥美半島などの例がある。

8　まとめー仮説ー

- ① “新しい分布地域”で最もよく利用されている食餌植物はバラ類である。熱帯・亜熱帯アジアのヤクルリにとって、これは新たに獲得した2次的な食餌植物であろう。そして、この系統が分布を北（東）に拡大させている。
- ② 広食性でツツジ、フジなどさまざまな植物が報告されているが、これらはさらに3次的に拡大したものであり、あまり積極的には利用していない。
- ③ 休眠性は獲得できていないようで、越冬できるかどうかは極めて不安定である。すべてのステージで冬に突入し、越冬可能なものだけが春を迎えている。大阪府南部、三重県中部、愛知県半島部から静岡県西部まで進出していることを考えると、岡山県平野部の冬の気温が低すぎるということは考えられない。
- ④ イチモンジセセリやウラナミシジミなどと似たケースといえるが、これらのチョウが強烈な拡散力を種の戦略としているのに対し、ヤクルリにはそこまでの移動力は感じられない。したがって分布拡大の速度は極めて緩やかである。
- ⑤ 安定的な食餌植物を得たために北進のスピードを加速させたナガサキアゲハ（栽培ミカン類）、アオスジアゲハ（街路樹クスノキ）、ツマグロヒョウモン（園芸種パンジー）などのタイプとも異なる。ノイバラなどのバラ類はどこの地域でも見られる。
- ⑥ チョウが分布を広げるパターンとして、供給源としての地域において何らかの理由で爆発的な発生が起こり、それが拡散を促すことが多い。しかし、岡山県の周辺（具体的には広島県）でそのようなことは起こっていない。
- ⑦ “従来の分布地”からの拡大、例えば九州南部から九州中北部へ、高知県室戸岬から徳島県・香川県の一部へ、三重県南勢の尾鷲市方面から中部の松阪市への拡大には20～30年を要している。“新しい分布域”付近では、現在停滞気味の地域が多い。広島では1990年代後半に進入して以来、ほとんど生息域を拡大していないという。兵庫県では淡路島から兵庫県本土側には入ってきていない。一方、三重県志摩地方の島嶼部から愛知県渥美半島、そして静岡県西部への拡大は早かったといえる。
- ⑧ 岡山県は宮崎県、徳島県、大阪府南部、三重県中部などのような“従来の分布域”に隣接した地域ではない。“新しい分布域”的先の、またその先である。
- ⑨ 以上のことを総合的に考えると、岡山県への進入が遅すぎると一概に言えないのかもしれない。比較的安定した生息地である広島県尾道市において、2014年はやや減少しているとの情報もある。広島県のヤクルリが高密度になって拡散の圧力が高まるまで、粘り強く観察を続けたいと思っている。

【参考文献】

- 江崎悌三・横山光男, 1954. 原色日本蝶類図鑑. 保育社. 東京.
白水隆, 1960. 原色台湾蝶類大図鑑. 保育社. 東京.
白水隆, 1965. 原色図鑑日本の蝶. 北隆館. 東京.
白水隆監修, 1972. 原色日本昆虫生態図鑑IIIチョウ. 保育社. 東京.

- 本間三郎, 1975. 昆虫 I チョウ. 学習研究社. 東京.
- 藤岡知夫, 1975. 日本産蝶類大図鑑. 講談社東京.
- 白水隆, 1976. 原色日本蝶類図鑑. 保育社. 東京.
- 福田晴夫 浜栄一ほか, 1984. 原色蝶類生態図鑑 (III). 保育社. 東京.
- 猪又敏男, 1990. 原色蝶類検索図鑑. 北隆館. 東京.
- 岩田靖, 1991. タテハモドキNo.27. 宮崎昆虫.
- 高橋秀男・勝山輝男監修, 2000. 山渓ハンディ図鑑 樹に咲く花. 山と渓谷社. 東京.
- 神垣健司, 2001. 広島県蝶類図鑑, 広島.
- 久保邦照, 2005. 奄美の蝶図鑑, 鹿児島.
- 白水隆, 2006. 日本蝶類標準図鑑. 学研. 東京.
- 野村賢二, 2006. もめてふ(218). 三重昆虫談話会.
- 岸勘治, 2008. 南大阪の昆虫Vol. 10.
- 狩山俊悟, 2009. 岡山県の樹木図鑑. 倉敷市立自然史博物館.
- 日本チョウ類保全協会編, 2012. 日本のチョウ. 誠文堂新光社. 東京.
- 沖縄昆虫同好会編, 2013. 沖縄県の蝶—記録された島と食草—. 沖縄.

【情報を提供していただいた方々（敬称略）】

—皆様に心から感謝申し上げます—

- 比嘉正一（沖縄昆虫同好会）
二町一成（鹿児島昆虫同好会）
小松孝寛（宮崎昆虫同好会）
三宅 武（大分昆虫同好会）
後藤和夫（山口むしの会）
本田計一（広島大学大学院生物圏科学研究科教授）
神垣健司（広島むしの会）
三原真人（南大阪昆虫同好会）
西田悦造（三重昆虫談話会）

山口県で過去 74 年間に記録された迷チョウについて

後 藤 和 夫 (山口県)

■ はじめに

山口県で過去 74 年間(1940 年～2014 年)に記録された迷チョウは 5 科 20 種である。

その科別の内訳はアゲハチョウ科 2 種, シロチョウ科 3 種, シジミチョウ科 1 種, タテハチョウ科 13 種, セセリチョウ科 1 種になる。その採集地点を図-1 に示す。

■ 山口県で採集された迷チョウ

・アゲハチョウ科 *Papilionidae*

1. ホソオチョウ *Sericinus montela* 宇部市沖宇部(宇部空港敷地内) 1♂ 1988.8.13 森 寛採集
2. タイワンタイマイ *Graphium cloanthus* 光市上島田亀山 1♂ 1981.7.25 田村 博 採集

・シロチョウ科 *Pieridae*

3. チョウセンシロチョウ *Pontia daplidice* 山口市樺野川川原 1♀ 1940.6.9 森下和彦採集
4. ホシボシキチョウ *Eurema brigitta* 美祢市美東町赤郷 1♂ 2013.10.12 後藤和夫採集
調査から秋芳町の青景でも確認し、両地とも一時発生を繰り返した(山口のむし, 2014)。

5. ウラナミシロチョウ *Catopsilia pyranthe* 光市浅江 1♀ 1961.10.14 三好和雄 採集
発見後の調査から 10 月 28 日にかけて 4 個体以上採集されたが、その後の記録はない。

・シジミチョウ科 *Lycaenidae*

6. クロマダラソテツシジミ *Chilades pandava* 下関市安岡 1♂ 2009.8.24 角田正明採集
発見後の調査から県内の各地に分布を拡大し、2009 年 12 月 20 日頃まで発生を確認した。
また本種は 2011 年, 2012 年, 2013 年と続けて発生したが、2014 年は記録が途絶えた。

・タテハチョウ科 *Nymphalidae*

7. シータテハ *Polygona c-album* 萩市目代 1♀ 1955.4.15 上村 進 採集

この年から 1957 年にかけて川上村も含め複数の個体が採集されたことが判ったが、現存する標本はこの 1 個体のみで、その後の記録は途絶えた。また聞き取りから山口市も出てきたが、標本もなく証明する方法がないため、萩市での記録のみとなる。

8. タテハモドキ *Junonia almana* 光市光井(武田薬品敷地内) 1♂ 1987.10.20 福田竹美採集
ほかに豊田町金道から 1957 年に能勢義満氏の 1♂1♀ の記録があったが、標本は失われた。

9. アオタテハモドキ *Junonia orithya* 大津郡油谷町人丸稻石 1♂ 1987.11.3 米原万寿子採集
そのほか 1999 年に大島郡東和町森で、伴 一利氏により 3♂2♀ が採集された。調べた結果、羽化殻を確認し当地で一時発生したことが判った。2000 年代に入り下関市吉母で 1♂ を伊藤寿氏が採集し、下関市豊田町江良で 1♂ が佐伯真一により採集。さらに下関市吉母印内で 2♂ を筆者が確認している。

10. メスアカムラサキ *Hypolimnas misippus* 光市花園 1♀ 1963.8.6 嶋村 茂 採集

ほかに下関市老ノ山公園で 1963 年 8 月に岡 耿一郎氏が 2♂ を、老ノ山公園では 1979 年に武次廣二氏が 1♂ を、1986 年に武次房江氏が 1♂ を採集している。そのほか下関青山で松永善明氏が 1♂ を、防府市桑山で国広幸治氏が 1♂ を、萩市田床山で近藤隆史氏が 1♂ を、小野田市竜

王山で河口 誠氏が 1♂を、光市光井虎ヶ岳で藤谷 創氏が 1♂を採集した。

2000 年代に入り下関市綾羅木本町で藤川 匠氏が 1♂を採集した。萩市笠山で衛藤富美子氏が 1♂を撮影したが、この個体は前翅の付け根に赤紋が出現するタイプで稀に見る個体である。さらに下関市火の山で佐伯真一氏が 1♂を、同じく富任町で杉村孝志氏が 1♂を撮影し、山陽小野田市竜王山で弘津義擴氏が 1♂を採集している。

ほかに本種については、1951 年に宇部市で 1♂1♀の採集記録もあったが、失われた標本や、所在不明の標本も存在しており、迷チョウの中では一番多くの採集・目撃事例がある種である。

11. リュウキュウムラサキ *Hypolimnas bolina* 萩市川島中津江橋 1♀ 1965.9.19 井上雄二採集
ほかに萩市沖相島で、1975 年に 9 月から 10 月にかけて 3♂を山田里司氏らが採集している。

これは台風により複数の個体が運ばれてきたか、一時発生があった可能性もある。萩市見島で 1983 年に野原啓吾氏によりパラオ型が採集されたが、標本は失われている。

また小野田市南浜河内で筆者が 1♀を、岩国市三笠町では下野誠之氏が 1♀を採集した。

2000 年代に入り下関市綾羅木本町で藤川 匠氏が 1♂を、2014 年は山陽小野田市竜王山で筆者が 7 月 15 日に 1♂を採集し、7 月 18 日には岩国市由宇町錢壺山で、2♂を原田房江氏が撮影した。

12. ヤエヤマムラサキ *Hypolimnas anomala* 光市花園 1♀ 1956.8.19 幡田克彦 採集

13. ウラジャノメ *Lopiuga achine* 玖珂郡錦町河津 1♀ 1980.6.29 小山 博 採集

ほかに 1980 年代に玖珂郡錦町向峠にて 1♂を筆者が採集し、同錦町金山で 1♂が田中秀夫氏により採集。その後継続した事例がないため、隣県の広島県からの飛来個体として扱う。

14. ツマジロウラジャノメ *Lasiommata deidamia* 大島郡橘町源明峠 1♂ 1988.8.15

藤田俊文 採集

採集当時高所作業車まで持ち込み、岩場を中心に調べたが痕跡は発見できなかった。その後採集事例はなく、四国からの飛来した個体と判断した。

15. キマダラモドキ *Kirinia fentoni* 阿武郡阿東町十種ヶ峰 2♀ 1981.8.25 山本辰昭採集

採集個体が♀であることから、採集地を調べたが痕跡は得られなかった。その後も定期的に同好者は訪れているが発見できていない。現在採集されたとされる環境は変遷し、本種の棲息環境としては好ましいといえない。ただ大きな山塊であるため、どこかに隠れた棲息地が存在するかも知れないので注視しておく必要がある。迷チョウにはなりにくい種と考えられるが、継続性がないことで現時点では迷チョウとして扱う。

ほかに防府市畠(天神山麓の佐波川沿い)で 1958 年の古い記録があるが、採集者に確認したところ標本は失われている。その後も同好者はたびたび訪れたが、再発見に至らなかった。

16. ウスイロコノマチョウ *Melanitis leda* 萩市椿峠 1ex. 1955.11.21 上村 進 採集

萩市椿峠で採集されたのが県内で最初である。その後数多くの採集事例があり、毎年の様に夏季に採集され、秋季まで一時発生例はあるが、春先の 4 月頃に越冬したとされる個体は一例も記録されていない。耐寒性が弱く未だに迷チョウ扱いである。

17. ウスコモンマダラ *Tirumala limniace* 下関市上田中町 1♀ 1983.7.11 西川康夫採集

採集後長く未報告であったが、2010 年に正式に報告された(西川、2010)。

18. コモンマダラ *Tirumala septntrionis* 下関市蓋井島 1♀ 2014.5.22 福村拓己 採集

アサギマダラのマーキング調査で渡島し偶然ネットインされたものである(後藤、2014)。

19. カバマダラ *Danaus chrysippus* 防府市富海 1♀ 1957.8.18 上村 正採集

ほかに光市光井(柿林神社)で片岡宣彦氏が1♂を、同じく光市花園で加島 実氏が1♀を採集した。2000年代に入り周防大島町東安下庄で2009年10月1日に山本弘三氏が♀を確認し、継続調査で12月迄連続的に一時発生したことが判明した。2010年は9月に光市室積で福田 竹美氏が1♀を発見したのに続き、12月の初めまで連続的に一時発生を繰り返した。また2013年8月に大島町の東安下庄で山本弘三氏が確認し、12月まで発生を繰り返したが、この三例とも冬を越して春に成虫を見ることはなかった(山口のむし, 2011; 2012; 2013; 2014; 2015)。

・セセリチョウ科 Hesperiidae

20. タイワンアオバセセリ *Badamia exclamationis* 防府市大崎(玉祖小学校) 1♀ 1980.7.12
山本辰昭 採集

当時通っていた小学校内で採集されたもので、この一例しか記録は存在しない。

■ 迷チョウが山口県で採集される由来など

過去迷チョウが日本に飛来する要因などについて、多くの研究者が見解などを論じている。

2014年9月に発行された日本の迷蝶図鑑(菅原・高橋, 2014)は、過去国内で採集された迷チョウを一冊にまとめられたもので、かなりの力作である。その中では先島諸島で迷チョウが採集される要因である、気象に関する事項を深く研究・分析され、系統だって説明がなされており、有用なものと拝読した。

ただ山口県となると、少し離れているため全てが当てはまる限らないが、大要はこれに近いものと推察している。地球の温暖化なども大いに影響していると考えられる。

一般的には気象条件による“風”がほとんどの場合影響していることは、県内の採集事例を追求してもその様に考えるのが適論である。

■ 迷チョウとして扱うことに一考を要する種など

上記の20種類の中で、次に示す種に少し見解を述べる。

・ホソオチョウ：本種が日本で採集された由来は人為による移入種として考えられている。

宇部市で採集された個体は、日本の京都など東で採集された個体が、何らかの理由で採集者の手元を離れ、別の人により捕獲された個体と考えるのが一般的かもしれない。

・タイワンタイマイ：人為により船などで蛹が持ち込まれたものが、発生したのではとの見解も考えられる。

・シータテハ：元来山口県に定着していたのではとの見解も考えられる。その当時の聞き取りからは、採集した場所に自生していたニレは伐採され、その後採集事例もないことで、結果的に絶滅したことが考えられ。

・キマダラモドキ：迷チョウとして考えた場合、どこからかということになるが、採集地を考えた場合、他県(広島県や大分県など)から飛来するには、地形的なことも考慮し、少し無理が伴うのではないか。

♀であることと複数であることから、定着していた可能性もあるが、現在その環境は調べた限り失われている。今一度付近を広く調べなおすことも必要かも知れない。

以上の様な種について、さらに注意していく必要性が残されていると思われる。

■迷チョウとして分けし選定した概念

上記の 20 種を迷チョウとした根拠は、白水(1998)で提唱された“在来種”以外の、偶產種・迷チョウ・帰化種、さらに稀少種や記録のあいまいな種などを対象としており、これは山口県という限定された地域内での概念であるのでお断りしておく。

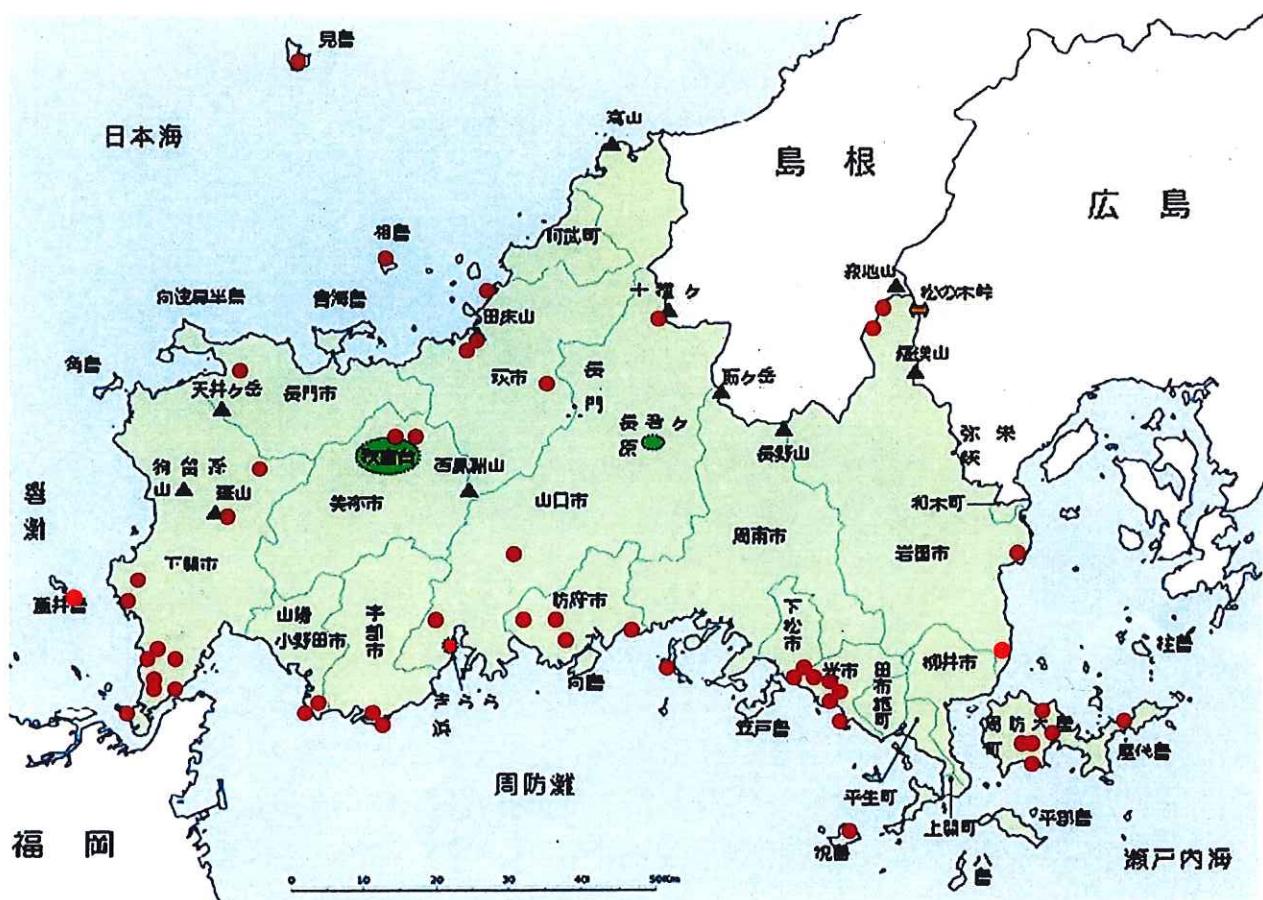


図-1 山口県内で採集された迷チョウの採集地点 ● (1940 年から 2014 年まで)

*クロマダラソテツシジミとウスイロコノマチョウは除く

参考・引用文献

- 伴 一利, 2000. 山口県におけるアオタテハモドキの記録. 月刊むし, (352) : 48-49.
- 藤川 匠, 2004a. 山口県下関市でメスアカムラサキ採集. 蝶研フィールド, (211) : 19.
- 藤川 匠, 2004b. リュウキュウムラサキを下関市で採集. 蝶研フィールド, (220) : 23-24.
- 後藤和夫, 2001. 山口県下のアオタテハモドキ追加記録. 蝶研フィールド, (178) : 25-26.
- 後藤和夫, 2014a. 山口県で 2000 年以後に記録された偶產蝶類について. 山口のむし, (13) : 43-46.
- 後藤和夫, 2014b. 山口県で採集されたコモンマダラ. 月刊むし, (526) : 2.
- 後藤和夫, 2015a. 山口県の蝶類目録(2014). 山口のむし, (14) : 1-4.
- 後藤和夫, 2015b. 山陽小野田市竜王山でリュウキュウムラサキを採集. 山口のむし, (14) : 34.
- 後藤和夫・三時輝久, 2000. 山口県で採集された偶產蝶類について. 山口県立山口博物館研究報告, (26) : 1-24.
- 稻田博夫, 2015. 岩国市錢壺山, 大將軍山山塊部一帯の蝶類. 山口のむし, (14) : 52-59.

- 伊藤 寿, 2005. 山口県下関市でアオタテハモドキ採集. 月刊むし, (408) : 42.
- 神垣健司・衛藤富美子, 2005. メスアカムラサキ山口県萩市で観察. 月刊むし, (418) : 6.
- 西川康夫, 2010. ウスコモンマダラを山口県で採集. 山口のむし, (9) : 47.
- 白水 隆, 1998. 蝶における土着種, 在来種, 帰化種, 遇産種などの用語の使い方について. 昆虫と自然, 33(22) : 2-3.
- 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 336pp., 学習研究社, 東京.
- 菅原春良・高橋 直, 2014. 日本の迷蝶大図鑑. 208pp., むし社, 東京.
- 山口のむし, 2002 ; 2003 ; 2010 ; 2011 ; 2012 ; 2013 ; 2014 ; 2015. 川元 裕, 後藤和夫, 佐伯真一, 角田正明, 稲田博夫, 山本弘三, 福田竹美, 五味 清, 杉村孝志.

山口県のギフチョウ採集自粛のお願い

山口むしの会保全委員会

山口むしの会では、山口県のギフチョウが危機的状況にあるとの認識に達し、全国同好の皆様に 2013 年春季から無期限で、山口県内での卵から成虫に至る全ステージ、およびカンアオイ類の採集自粛をお願いすることを、下記の文章でお知らせしました。

本県のギフチョウは、以前はさほど珍しい種ではありませんでしたが、自然環境の人為改変や植生遷移が進み、最近では地域ぐるみで生息環境の保全活動に乗り出している一部地区を除いて個体数が激減し、かつての多産地でもめったに見かけることができなくなりました。

このような状況下で、日本の西限地域という地域特性からか、毎年採集者が殺到して採集圧を加えるとともに、生息地域の住民や保全活動に取り組む方々との摩擦が顕在化しています。

そこで、まずは本県ギフチョウの窮状を訴え、同好諸氏の賢慮に期待して今後の推移を見極めるのが現状では最善と判断したものです。

採集圧のみを抑制しても個体数が回復する保証はありませんし、法的根拠を伴わぬ採集“自粛”では決定的な拘束力となり得ないことも承知しています。しかし、何の法的権限もないのにこのようなことを皆様に要請せざるを得ない現状をご賢察ください。

やがて個体数の回復が見込める見極めがつけば自粛を解きたいと考えていますので、趣旨をご理解の上ご協力をお願いします。しかし、今後の状況次第では保全活動と法的拘束力を伴った措置をセットで行政に働きかけることになるかもしれないほどの状況にあることもご認識ください。

最後に、山口県のギフチョウは、せっかく来県されても成虫を見ることすら叶わないことも珍しくありませんし、地元住民が保全活動をしている地域での採集行為はもっての外ですので、皆様の冷静で賢明な思慮を期待します。

採集自粛要請から 2 年経過しましたが、大きく改善することは無く、厳しい状況に変わりありません。保全活動とシーズンには交代で現地視察と観察を続けていますが、いまだに県外の採集者が来訪されるなど、このままでは拘束力を伴う措置を行政に働きかけることになりかねません。引き続きご協力を宜しくお願ひいたします。

2015 年 3 月吉日
山口むしの会

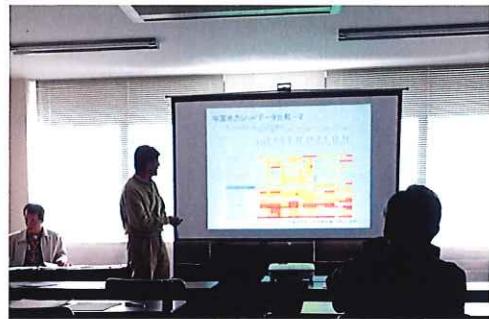
中国支部第 16 回例会の報告

第 16 回中国支部例会は 2014 年 11 月 15 日（土），一般財団法人島根県中央労働福祉センター（労働会館）で一般参加（地元紙に催し物案内を掲載）を含め 10 名の参加により研究発表と意見交換を行った。

[研究発表]（敬称略）

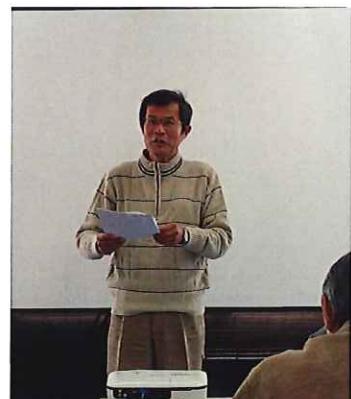
- ① 岡山県に於けるベニモンカラスシジミの生息地と食樹に関する最近の知見（岡山県：三宅誠治）

岡山県におけるベニモンカラスシジミの生息地調査の結果を発表。3 種の食樹が岡山県内では確認されている。調査の過程で，1箇所の生息地が開発により狭まっていることが確認された。本種の主な生息地は石灰岩地帯であるが，それ以外の地域でも生息は確認されている。



- ② ヤクシマルリシジミはいつ岡山県に侵入してくるか（岡山県：岡野貴司）

分布拡大を続けるヤクシマルリシジミ。中四国の中瀬戸内海沿岸で分布しないのは岡山県だけ。広食性なので，餌の問題はないと思われる。岡山県でまだ生息できないのは，冬季間の休眠性を獲得できていないからではないか。岡山県の寒さに対して適応できていないことが原因ではないか。隣県で個体密度が増加すれば，岡山県にも定着する可能性がある。



- ③ 山口県で過去 74 年間に記録された迷蝶について（山口県：後藤和夫）

山口県で 1949～2014 年の 74 年間に記録された迷蝶は，5 科 20 種である。大半は南方系の種であるが，中には大陸由来や国内他地域からの種も記録されている。併せて 2014 年に記録されたコモンマダラが紹介された（月刊むし 526 号に掲載）。



[総会]

総会は田村が議長につき、支部会報 15 号（18 頁）を発行、会計報告、鱗翅学会総会報告等を行った。現在の会員数は 50 名である。

自然保護委員会では「日本産蝶類の衰亡と保護第 7 集」を 2015 年春に発行。そのための資料作成をお願いする。

今回の例会協議テーマは、2015 年の全国大会のことであった。田村からシンポジウムを“環日本海諸国の鱗翅目”とし、内容について提案をし、パネラーについて話し合いをした。大会時の態勢についても話し合った。たくさんのアイデアが出された。

[例会参加者]（順不同・敬称略）

矢野重明、本田計一、後藤和夫、岡村元昭、岡野貴司、三宅誠治、淀江賢一郎、筆谷憲一、田村昭夫

非会員：内田俊夫



参加者集合写真

前列左から：内田、筆谷、矢野、岡村、本田、後列左から 淀江、三宅、岡野、田村、後藤

日本鱗翅学会第61回大会（鹿児島）の報告

2014年10月25日～26日（土、日）
会場：鹿児島大学

参加者

本田計一（広島），田村昭夫（鳥取）

- ・ 今回は全てポスター発表であった。25 ポスターが発表された。
- ・ 公開講演会 “チョウとガにとっての奄美諸島”
- ・ 公開シンポジウム “日本の昆虫同好会の過去・現在・未来～どのような虫屋をそだてるか～”
- ・ 小集会4（“アサギマダラプロジェクト” “チョウ類の多様性と進化を考える” “自然保護委員会—新たな生態系の脅威～外来種問題と害獣問題～” “昼行性蛾の魅力に迫る”）
- ・ 名古屋議定書についてのミニ講演（環境省）

評議委員会・総会から

*大会ローテーション鳥取（2015, 10/31, 11/1），藤沢，仙台，信越，近畿，北海道，2026 年まで開催支部決定

*会員獲得—若手会の年齢を 30 歳までとし，4500 円（入会金なし）とする。

*インセクトフェア（2000～3000 人来場）に参加：今年 2 回目の参加（正式な形で—学会からは間野氏，四方氏，宇野氏，矢後氏も参加）：書籍が多く売れた。入会申込書を持って帰った人もいた。中国支部会報販売。6 部販売。（入場費 600 円）。（田村は客として参加）

*予算対策—“蝶と蛾”の PDF 化を実施予定（2015 年度開始は無理）。2030 年までに基金が底をつく（実績ベースでは 2024 年）。

会計決算

*アサギマダラプロジェクト 2013 年度報告。

*自然保護委員会報告

- ・東海支部からリニア中央新幹線トンネル工事に伴う土砂置き場と希少種（クモマツマキチョウ，ミヤマシロチョウ，オオイチモンジなど）の生息地が重なることへの JR 東への要望がなされた。
- ・ツシマウラボシシジミを繁殖させている。将来放鳥するための生息地の環境整備。
- ・「日本産蝶類の衰亡と保護第 7 集」を 2016 年春に作成・出版予定。執筆要項はメール配信の通り。

* 名古屋議定書—アマチュアの海外採集（調査）が厳しさを増す。

* 会計不備—会員からの指摘により調査。

- ・記載漏れ，誤記など—2014 年に再監査。3 月評議委員会で承認。お金はきちんとある。

会計報告

2014年度の会計を報告します。

2014年度会計報告

○収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越金	37,422	
2014年度支部交付金・活動助成金	49,250	(支部連絡費9,600円、支部助成金39,650円)
例会参加費	5,500	会員9名、非会員1名
会報売上	2,400	
懇親会余剰金	16,638	
預金利子	11	
計	111,221	

○支出の部

項目	金額	備考
支部会報第14号印刷費	44,496	100部印刷
支部会報第14号送料ほか	5,460	原稿、会報郵送料
例会費等	22,548	会場費
例会案内発送料	1,722	21人分
事務費	1,605	事務消耗品
計	75,831	

○2014年度繰越金

111,221円 - 75,831円 = 35,390円

35,390円は2015年度へ繰越ます。

中国支部例会案内

今年度は全国大会が鳥取市で行われます(10/31,11/1)。その時に、中国支部例会も11月1日(日)に行います。

多くの方々の参加をお待ちしています。

あとがき

2014 年度例会へ参加された皆様、ご苦労様でした。2015 年度例会は、鳥取大会開催中に行います。皆様の参加をお待ちしています。ようやく支部会報 16 号ができ上りました。おかげをもちまして、今年度は昨年度よりも早くでき上りました。

2015 年度はいよいよ鳥取大会開催の年です。みんなで盛り上げていきましょう。折角の中国地区での大会。皆様の多くの来場を期待しています。

支部会員向け連絡についてですが、経費節約の観点から、できるだけメールで送りたいと思います。アドレスをお持ちの方、変更された方は、下記事務局へご連絡ください。

皆さんの今年度の活躍を期待しています。

文献紹介

「日本産チョウ類衰亡と保護第 7 集」都道府県別レッドリスト

来春にも発行予定です。中国地方では、各県の自然保護委員を中心に作成しました。今回のリストは“チョウ”だけです。

今回リストの作成に携わり、普通種のように思っていたチョウの記録が意外と少ないことに気がつきました。普通種（特に小型セセリ類）と思われている種の記録の蓄積が大切です。普段からの調査が大切ですね。

各县の自然保護委員の方、編集ご苦労様でした。

役員紹介

支部長：田村昭夫

支部幹事：鳥取県；田村昭夫

島根県；淀江賢一郎

岡山県；岡野貴司

広島県；渡邊一雄、神垣健司

山口県；川元 裕

自然保護委員：鳥取県；田村昭夫（代表）

島根県；淀江賢一郎

岡山県；伊藤國彦

広島県；渡邊一雄

山口県；後藤和夫

日本鱗翅学会中国支部会報

第 16 号

発行日：2015 年 4 月 1 日

編集者：田村昭夫

発行者：日本鱗翅学会中国支部

682-0881

鳥取県倉吉市宮川町 2 丁目 74 番地

田村昭夫 方

印刷所：株式会社トライ・エックス

日本鱗翅学会中国支部事務局

〒 682-0881

鳥取県倉吉市宮川町 2 丁目 74 番地 田村昭夫

TEL/FAX:0858-22-7707

E-mail:marutan.tamura@ncn-k.net

2016 年より新体制となります。私の支部長としての任期も今年度で終了です。

目 次

支部長挨拶	1
1. 岡山県に於けるベニモンカラスシジミの生息地と植樹に関する最近の知見 三宅誠治	2-4
2. ヤクシマルリシジミはいつ岡山県に進入してくるか 岡野貴司	5-11
3. 山口県で過去74年間に記録された迷チョウについて 後藤和夫	12-16
4. 山口県のギフチョウ採集自粛のお願い 山口むしの会保全委員会	16
5. 中国支部第16回例会の報告 田村昭夫	17-18
6. 日本鱗翅学会第61回大会(鹿児島)の報告 田村昭夫	19
7. 会計報告 田村昭夫	20
あとがき	表紙3
日本鱗翅学会中国支部規約	表紙2

〈表紙写真〉

ベニモンカラスシジミ 27・V・2014 岡山県井原市(旧後月郡)芳井町日南

2014年5月25日に撮友2名とベニモンカラスシジミの生息地に出かけた。ここ岡山県井原市(旧後月郡)芳井町日南は、ベニモンカラスシジミの観察ポイントである。蛹は2ヶ所で数個発見できたが、成虫は見ることがなかった。撮友の1人は泊りがけであるが、どうしても撮りたい訳ではなく、生息地で蛹とともに過ごす雰囲気を楽しんでいるという具合である。勿論、撮影出来るに越したことはない。小さなキビノクロウメモドキの幹に2個の蛹が上を向いて仲良く寄り添っている。周辺を飛ぶ個体と羽化待つての持久戦となった。

27日、再び訪れたが2個の蛹は羽化していないかった。撮友は、椅子を持ち込んで相変わらず待撮りを決めていた。私は少し離れた場所の蛹はどうしても気になり、様子を見に行くことにした。撮友は“しんどいから行かない。”という。そこは車を置いてから勾配のある藪を通り、大きな石灰岩がゴロゴロしている急峻な場所である。やっとの思いで辿り着いたのは10時30分頃であった。蛹は、少し開けた場所にあるキビノクロウメモドキの老木にいる。祈るような気持ちで目をやると、蛹の近くで♀と思われる立派な個体が静止していた。タイミングはどんぴしゃり。もし遅く来ていたら?と胸を撫で下ろした。慎重に近づき、約30cmのところからカメラの位置を少しずつ変えながら30枚位撮り終えたところで飛び立った。これはその中の一枚である。

(撮影者・難波通孝)